翔べ！世界へ

世界的ネットワークの楽しさと期待

～世界55カ国からの高校生との共同生活と社会貢献活動～

置かれていたような気がする。

日本における介護や少年犯罪の問題解決のためにも、私のUWC経験の観点では、「小中高生が地域の老人のお部屋に行って掃除したり、一緒にお茶を飲んで遊ぶ」といったプログラムが日本でも導入され、多くの方々が、人と人のつながりの深まりから生まれる喜びに触れられる無償の奉仕活動が育まれていくことを強く望んでいる。

世界的ネットワークとインターネット―地球的課題への挑戦

UWCで学んだおかげで、日本の高校からは行く術もなかったオックスフォード大学と大学院に進学することができた。また、オックスフォードで学べたおかげで、ゴールドマン・サックス（ルービン前米国財務長官の出身銀行）やラザード・フレール（秋の大統領選後の財務長官候補ラトナー副会長を擁する投資銀行）という投資銀行で働くことができ、ビジネスの基礎や財務、経営戦略を学ばせていただいた。そして、インターネットの重要性に触れたのは、ラザードの顧客であった九四年のAOLスティーブ・ケース会長の訪日に端を発している。

私が日本法人を創業したeグループは、この八月末に米国のYahoolの傘下に入った。世界中の一億五千万以上のユーザーにサービスを提供しているYahoolと瞬時にコストをかけることなく数億人の方々に電子メールを配信できるeグループ。そして、UWC時代の世界中の友。何とか、この三つの特長を活かせる仕事がしたいと考える今日このごろである。

地球には、人口増加とエネルギー・食糧の問題、地球温暖化から生じる自然バランスの崩壊、環境の保全や民族紛争、貧困の終結など、地球的規模で話し合いがなされなければいけないチャレンジがたくさんある。インターネットという技術革新によって、時間と距離の壁や情報伝達コストは、大幅に低くなった。巨大な情報ネットワークと人と人が結びついていくネットワーク、この人類未踏のメディアで何がなせるか、楽しい挑戦に期待している。

ケニア、英国、サモアの友と（右から２人めが筆者）

経団連が事務局を務めている各種奨学金運営団体の活動により、毎年高校生から大学院生までの多様な奨学生が留学し、今日、その経験を活かして内外のさまざまな分野で活躍している。本コーナーは、留学先での経験と現在の活動の模様を紹介することにより、これら奨学生を送り出してきた奨学金運営団体への一層の理解促進と、これを支え、協力してくれた企業への活動報告とするものである。

㈳ユナイテッド・ワールド・カレッジ（UWC）日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒達との教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名以上の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下のカレッジに派遣し、すでに三四〇名以上の卒業生を輩出している。

お問い合わせ・連絡先
経団連社会本部

注２：フィリップ殿下等、英国王室の子弟が学ぶゴードンズタウン校を創立したKurt Hahnや故マウントバッテン卿が、第２次世界大戦への反省をきっかけに1962年に創立。世界中から奨学生試験で選出された考え方の柔軟な高校生が、国際理解と社会貢献、人命尊重を理念とする教育を受けることを目的にした全寮制の国際学校。北米以外の高校からのハーバード大学への進学トップの実績を持ち、携帯電話世界最大手のノキアの社長など世界中に多くの人材を輩出している。　http：//www.uwc.org

奨学生体験者からの寄稿㉟

大山彰久

おおやま　あきひさ

eグループ社長

akioyama@egroups.co.jp

UWCアトランティック・カレッジ〔英国、1979〜81年〕
84年オックスフォード大学数学部卒業。86年オックスフォード大学経済学部修士号取得。86年米国ゴールドマン・サックス社入社。89年米国ラザード・フレール社入社。96年オープン・ジャパン社創立（電子決済サービス会社サイバーキャッシュを含む３社のアドバイザー）。99年eグループ株式会社創立。代表取締役社長に就任。注1

私は、第八回UWC（ユナイテッド・ワールド・カレッジ）奨学生として、英国ウェールズにあるアトランティック・カレッジ注2にて、今から二〇年前の一九七九年から一九八一年まで、かけがえのない経験をさせていただいた。

当時は、まだ留学が珍しい時代だった。自分の進路が大きく世界に向けて開けたこと、国境を超えた友情や人間としての共感の大切さを学べたことなど、UWC日本協会には心より御礼申し上げたい。

すばらしい国際学校（United World Colleges）

UWCに関しては、

「とても、楽しかった」「すばらしい学校だった」「同じような学校がもっと増えて、さらに多くの国からの高校生にすばらしい経験を共有してほしい」

という印象を持ち続けている。また、恩返しとして、自分のライフワークとして、まだUWCに高校生を派遣することのできない多くの国々の将来のため、自らが奨学金をたくさん寄付できるようになろうと日夜努力している。

「UWCでの生活は？」と記憶をたどると……

踊りながら共同シャワー室で遊んだ寮仲間。ガールフレンドの悩みを聞いて、一晩夜を明かしたり、ダンスパーティで英語でなんとしゃべってよいのやら等、実は、教室の中で勉強したことより、さまざまな国から集まった友達と遊んだことが一番強烈に思い出される。このような笑いと涙と葛藤を、国籍や習慣、信条も違う高校生たちと寮生活という非常に長いタイムスパンの中で分かち合えたことが、一番大きな財産になった。当然、個人個人の差異はあるが、それ以上に、同じ人間としての喜怒哀楽の感じ方に国境はなく、共有でき共鳴できる部分が非常に多くあるということを肌で学んだ。また、その時に結ばれた友情が二〇年たった今でも、世界中の多くの友と続いていることもUWCの貴重な成果であると信じている。

人と人を結んだもの―ケーキや笑い

どこの世界でも同じことなのだろうが、友への思いやりや優しさ、グループの中での貢献度やユーモアというものが、語学や成績以上に大切な人間としてのクオリティだということをUWCの生活で強く感じた。言葉はできなくても、誕生日に友のためにケーキを焼いたり、スポーツをしていてもチームのために貢献できる人が、学校での貢献度は高かったように思う。

UWCでは「経験学習」を重んじるデューイやペスタロッチの影響か、背景の違う人間が共有体験を持てるプログラムがたくさん組まれていた。週に八〜一〇時間の社会奉仕または人命救助サービスと、偏りのない芸術・スポーツ・文化クラブ活動等への参加が義務付けられており、私も海難救助員としての訓練、盲人学校でカヌーを教えたり、老人家庭への訪問と掃除、教会の清掃等多くの実体験を積ませていただいた。言葉は通じなくても、身振り手振りでも共有体験を多く持つことによって、人と人が友情を育みながら共に学べることを実感できたのは財産である。また、救急処置や人命救助方法の体験学習や一週間のキャンプ生活も全員参加となっており、人命尊重と共同生活の中での個の自立にも重きが

注1：世界最大のインターネット上の無料グループウェアサービス会社。スタンフォード大学コンピューター学部の博士課程の学生３人がアパートの一室で創立。この２年間で、約2,000万人のユーザーに１日１億通近くの電子メールを配信。日本法人は、１年前にスタート、現在、140万人のユーザーに、１日約140万通のメールを配信し、月に20万〜30万人規模で増加中。　http：//www.egroups.co.jp